

古代ロマン息づく鼠蔵町

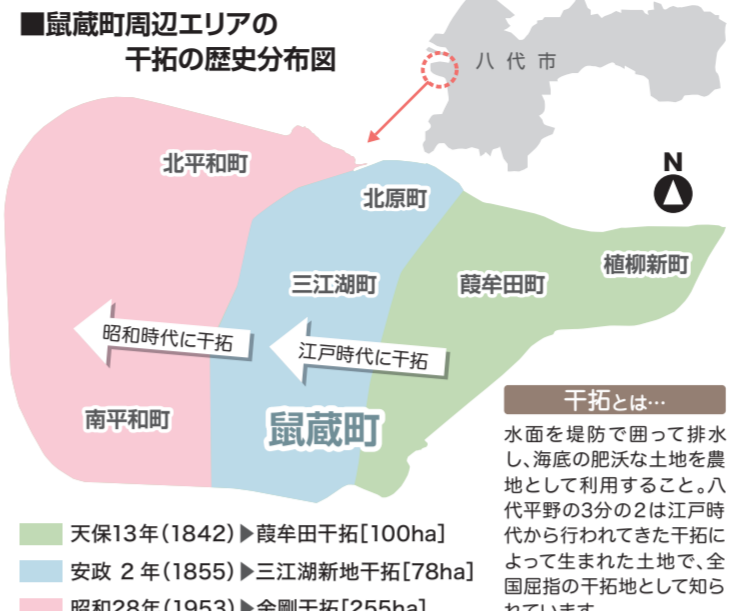
4世紀半頃のものと思われる古墳群、大鼠蔵山&小鼠蔵山。江戸時代から始まる干拓により、今では田園地帯が広がります。鼠蔵という不思議な名前を持つまちの魅力、新たに紐解いてみましょう。

大鼠蔵山と小鼠蔵山は、干拓で陸地化する以前は海に浮かぶ島だった！

弘化4年(1847)の干拓、昭和元年(1926)の干拓事業により、八代海に浮かぶ小島が陸続きとなりました。江戸期の絵地図(図1)を見てみると、現在の鼠蔵町に流れている球磨川はなく、八代海に浮かぶ島でした。今年(2026年)は、この平和町が含まれる昭和地区の入植100周年(昭和100年)を迎える節目の年でもあります。



図1: 江戸期の絵地図(伊能忠敬「伊能図大全」参照)



■鼠蔵町周辺エリアの干拓の歴史分布図

干拓とは… 水面を堤防で囲って排水し、海底の肥沃な土地を農地として利用すること。八代平野の3分の2は江戸時代から行われてきた干拓によって生まれた土地で、全国屈指の干拓地として知られています。

鼠蔵町豆知識① 鼠蔵という名前の由来を紐解く

治時代から昭和まで活躍した、官僚であり民俗学者の柳田國男が発表した論文「鼠の浄土」では橋南翁の『西遊記続編』寛政7年(1795)より10年に渡り出版を紹介し、鼠蔵島について考察しています。国内に鼠が多く住む島は他にもありますが、「ばんよく知られているのが鼠蔵島」との記述がある、論文の冒頭に登場します。



『鼠の浄土』



柳田國男(1875-1962) 日本の近代における「日本民俗学の父」と称される著名な民俗学者。市井の「普通の人々(常民)」の生活や信仰、口承文学に光を当て、独自の学問体系を確立した。

鼠蔵町には高群逸枝が住んでいた!

詩人、小説家、民俗学者。女性史学のパイオニアである高群逸枝(1894-1964)は、1964年、宇城市出身は、彼女の自伝となる『火の国の女の日記』に「私たちが落ち着いたのは金剛村弥次海岸だった」と書いています。夫で編集者の橋本憲三と共に東京から故郷熊本へ向かい、現在の鼠蔵町の漁師が住む前平地区の貸家を住居にしました。



『火の国の女の日記』



高群逸枝(1894-1964) 詩人、民俗学者、「女性史学」の創始者。日本古代には女性中心の「母系制」社会が存在したことを実証し、日本の女性史研究の基礎を築いた。

豊かな緑 不知火海を一望! 大鼠蔵山・海辺の森歩き

地元住民の心の故郷、町を見守る大鼠蔵山

八代不知火線(県道338号線)を日奈久方面に向かって進むと、金剛エリアに入ると西側に高低い山・大鼠蔵山が見えてきます。標高46mほどの小山で、入り口から階段を上ると、そこはやさしい木漏れ日。そこはやさしい木漏れ日。昔から町の住民にとって心の故郷であり、子どもたちの遊び場でもある大鼠蔵山。地元町内の皆さんで清掃し、日々のウォーキングコースとしても親しまれています。大鼠蔵山こそ歴史の詰まった玉手箱。これほど身近に、こんなに美しい木々に抱かれる森があったとは驚きでした。



1前平エリアより150段の階段を一気に登ると加藤神社があります。2鳥の鳴き声が響き渡る、心地よい山道。3楠木山古墳へ行くには横階段を上ります。4不知火海と干拓平野が一望! 5独特のフォルムをした狛犬。6日の当たらない地面のいたるところに吾がびつり。7尾張宮古墳へ続く山道。8表紙で紹介した絶景スポット。9階段から眺める不知火海。10階段を降りると巨大なアコウの木が!

大鼠蔵山と小鼠蔵山の間に沈む夕陽。

鼠蔵町の町内長・木村茂さんに聞く!

町民みんなで町の伝統を守り継ぐ

昔は漁師さんも多かったけれど今は農家町。以前はすべりいぐさ農家でしたが、現在はレタスやブロッコリーなどの露地栽培、そしてトマトなどを作る二毛作の農家がほとんどです。



鼠蔵町の年間祭事

5月19日 ▶ 龍神宮春の例大祭
8月14日 ▶ 鼠蔵町夏祭り
9月24日 ▶ 加藤神社秋の例大祭
10月19日 ▶ 龍神宮秋の例大祭
12月24日 ▶ 加藤神社願解き
1月24日 ▶ 加藤神社願掛け
3月15日 ▶ 尾張宮春の例大祭

鼠蔵町の夏祭りはすべて町民の手作り! ジャンケン大会や盆踊り、サイダー飲みゲーム、スイカの早食い競争など、地域が一体となって子どもから大人まで一緒に楽しむお祭りです。

鼠蔵町豆知識② 尾張宮と「白飴」のお話

尾張宮

町内長の木村茂さんの話では、小さい頃はいつもお宮で白飴が供えられ、子どもたちは山に登るとその白飴を食べるのが楽しかったそうです。

鼠蔵町の子供達が3年生まで通う 金剛小学校 弥次分校

2025年に創立150周年を迎えました!

お魚教室

子どもたちに魚に親んでもらうため、毎年金剛小の2年生を対象に【お魚教室】を実施しています。町の漁師さんたちが魚の種類や生態を教えたり、魚料理をふるまったりします。

加藤神社への奉納行事、鼠蔵町伝説の「女相撲」

鼠蔵町の女相撲は150年前に始まったとされます。きっかけは新地干拓にあり、干拓は潮が引いた時を狙って堤防を造ることから始まりますが、工事が非常に難しく、人柱を立てることもあったほどでした。しかし、人柱ばかりでは問題があるので、「女相撲」を奉納することになったといわれています。

女相撲は二世代で途絶えましたが、昭和44年に復活。加藤神社に電灯がついて100年目となる「百年祭」の催しで前平の上組で復活させたそう。復活当時、女力士は30〜40歳の11名。その後、日奈久温泉神社で植柳下町の女相撲の組と対戦して一躍有名になり、テレビでも放送されました。昭和63年の時点で宮川ハツエさん(写真後列中央)が三代目の横綱に。しかし平成16年(2004)には後継者が不出、メンバーも高齢化のため途絶えてしまいました。

前平の漁師である岡マチコさん(前列左から3人目)は、女相撲力士最後のひとり。「行司が宮川進さん(後列左から2人目)、呼び出しは宮川さんの奥さん(後列右)でした。マチコさんの四股名は「若島津」。写真当時は30代だったとのこと。ご主人の秀記さんも男相撲をしていました。仲睦まじい二人は同級生です。

鼠蔵町周辺マップ

大鼠蔵山の概略図

- 龍神社: 春と秋に祭事があります。農耕や生活を守る水の神として信仰されています。災いを防ぐ守護神であり、雨乞いの神としても敬われています。
- 加藤神社・権現神社: 敷地内には土俵があり、奉納相撲が行われていました。以前は「女相撲」に加え、「青年相撲」には榎柳や二見、天草からも参加があったそう。
- 楠木山古墳: 4世紀後半につくられた八代最古の古墳。県内でも最も古い前期古墳として知られ、遺体を埋葬した石室は竪穴式。小高い丘にあり大鼠蔵山の頂上付近。素晴らしい眺望です。
- 尾張宮&尾張宮古墳: 個人の方が病氣平癒のために造った神社。
- アコウの木&小春稲荷: 「大鼠蔵のアコウ」と言われ、樹齢300年以上の巨木として親しまれています。幹のうねり具合は太迫力!
- 尾張宮大明神: 尾張宮大明神が祀られる神社の下にある横穴式石室。内部は赤く塗られ、同心円文が3個彫られているそう。
- 大鼠蔵古墳群 楠木山古墳: 球磨川の河口付近にある標高46m・東西400m・幅100~170mの小山。4世紀から6世紀にかけて造られた多くの古墳群が残る、歴史的にも貴重な場所です。
- 小鼠蔵山: 標高35.3m・東西200m・幅100mの小山。5基の石棺があり、小型横穴式石室に見える箱式石棺があります(※現在、山には入れません)。
- 馬頭観音(上組): 上組エリアの農家組合で祀られたもの。毎年4月4日が例祭で、神事後は花見をします。
- 馬頭観音(下組): 鼠蔵町全体で祭りをを行います。当初は農耕馬の供養として祀っていましたが、現在は交通安全祈願の色彩が強くなりました。3月4日が神事。毎日近所の方がお茶を、1日と15日は酒と花をあげています。
- 大鼠蔵山: 大鼠蔵山と小鼠蔵山の間に沈む夕陽。
- アコウの木&小春稲荷: 尾張宮大明神が祀られる神社の下にある横穴式石室。内部は赤く塗られ、同心円文が3個彫られているそう。
- 大鼠蔵山: 大鼠蔵山と小鼠蔵山の間に沈む夕陽。
- アコウの木&小春稲荷: 尾張宮大明神が祀られる神社の下にある横穴式石室。内部は赤く塗られ、同心円文が3個彫られているそう。

取材協力: 資料提供 鼠蔵町町内長 木村茂さん、今村敏さん、小島寛隆さん、岡真美さん、八代市立金剛小学校 ©参考資料: 『夜豆志呂』92号、「八代伝」、『女相撲民話』、ふるさと通信社「八代」、『ふるさと百景』、熊本県広報誌「くまの風」6月号(No.98)、『高群逸枝 1894-1964 女性史の開拓者のコスモロジー』、『詩と真実』758号